

# 日本列島海民に関する歴史民俗学的検証

—熊野と能登を事例として—

森栗 茂一

MORIKURI Shigekazu

神戸学院大学人文学部

**要旨** アジール論、百姓論、職人論などで大きな足跡を残した中世史家、網野善彦の説は、日本史学専門家のなかでは「一世を風靡したもの」と評価され、十分な論議を避けられてきた。本論は網野が水産庁の未返却文書を返却する過程で発見、確認した漁業・塩業・廻船および掠奪をふくむ複合的百姓である海民仮説について、和歌山県熊野および石川県能登で検証した。その結果、熊野では中世の水軍小山氏と近世鯨方や廻船とを直接結びつけることは困難であるが、能登では常民文化研究所が調査した上時国家のみならず、塩釜や魚油釜を作っていた中居の鋳物師や珠洲でも、漁業・塩業・廻船・肥料商売・売薬などの複合的の海民を確認することができた。

その結果、網野の海民論については、個々の地域の生活世界を検証することで、海民論が成立する地方もあれば、検証が困難な地方もあることがわかった。むしろ、こうした検証なしに、網野の仮説に対する議論を避けてきた日本史学のなかにこそ、大きな課題があることを指摘した。

2024年の能登大地震でも、地域の被害は甚大で、被災後の過疎化は急激であろう。誇りある能登の歴史文化をこの時点で海民として確認することは、微力ながら実践的意味があり、歴史学のひとつの方向であることを展望した。

**キーワード** 海民、熊野、能登、網野善彦、塩業、廻船

## 1 はじめに

中世漁民研究は、『若狭漁業史料』（小葉田 1965）編纂を大きな契機に、中世漁村や漁場の成立過程に関する研究が伸展した<sup>1)</sup>。網野善彦も若狭史料で「中世における漁場の成立」（網野 1963）を著している。その後、網野は「日本における海民の存在形態」（網野 1970）、「経済史再考－前近代社会を中心に－」（網野 1999）などで、漁業のみに焦点化した漁民とは区別して、漁業・塩業・水運業・商業からときに掠奪までの未分離生業を担った人々（海部、海夫ともよばれる）を海民と定義し、その多様性複合性、海を通じた交流活動を論じている<sup>2)</sup>。

錦昭江は「中世・近世移行期における海辺村落の動向：狭諸浦の分析を中心として」（錦 1994）、『刀禰と中世村落』（錦 2002）で、刀禰による塩浜、または漁村兼塩浦の経済社会を論じ、16世紀中ごろ、若狭の武田氏滅亡後、武田氏庇護のもとの刀禰である大音氏の特権が弱まり、小浜、敦賀の商人が台頭したことを論じている。

網野以外で、漁民の多様性複合性、海を通じた交流活動に関して論じられたものは多くない。

田中豊治「但馬漁業の展開とその流通構造」(田中 1973) は、近世史料から鰯網役、鰯網役、浜役(塩)、漁船役、貝取役、鯖分役、船往来運上、塩数木船役など、海民の複合経営の生活について税役をもとに描いており注目される。

また泉雅博「近世北陸における無高民の存在形態－頭振について－」(泉 1992) は、塩鰯、塩辛、刺鯖(背開き塩鯖) など漁業・魚加工・塩業の無高下人労働者である頭振や、塩合魚製品について論じている。泉は「能登の北前船交易－下張り文書の整理作業のなかから－」(泉 1994) で、能登上時国家を中心とした北海道への廻船交易や多様な商品生産・商業活動について論じている。下張り文書とは、1985-94 年にかけて実施された、神奈川大学日本常民文化研究所の「奥能登時国家調査」のなかで新シ蔵にあった大福帳などの伝来文書ではなく、襖の下張りから発見された文書である(泉 1994、p.284)。

中世塩業に関しては、戦前、豊田武が「中世京都に於ける塩・塩合物の配給」(豊田 1934) で、塩・塩合物に関する流通を論じている。戦後は、渡辺則文が、在地領主との関係での塩業生産構造を分析し(渡辺 1952)、『日本塩業史』(渡辺 1971) では、若狭名主の塩田経営や、対馬、五島の家父長的名主経営を論じている。網野も「平安時代末期－鎌倉時代における塩生産－」(網野 1980) で、荘園公領制と塩生産、平民百姓による塩生産、神人による塩生産、在地領主による塩生産と流通について論じている。

一方、塩業技術史としては、広山堯道『日本製塩技術史の研究』があり、中世の塩田として、若狭、弓削島、小豆島、南伊勢、伊勢揚げ浜式古式塩についても紹介している(広山 1983、p.71-123)。『日本製塩技術史の研究』はあくまで近世を中心とした塩業技術の論述であり、漁業、廻船を含めた複合的な海民の在地経済の論述ではない。阿部毅「中世塩業に関する一考察」(阿部 1952) も、入浜式・揚浜式塩田の技術導入時期についてのみ論じている。能登については、吉岡正松「能登塩田の歴史地理的考察」(吉岡 1952) が、揚浜式塩田の奴隸的労働<sup>3)</sup>を報告している。

網野は、家父長的名主経営や奴隸的労働、または塩業技術にとどまるのではなく、漁業・塩業・水運業・商業から掠奪までの未分離生業を担った海民を、広義の「百姓」と定義し、その多様性複合性ある生活世界<sup>4)</sup>を論じている。

しかし、実証主義、社会構成主義(安良城 1953)の立場にたつ、戦後歴史学のひとつの主流からは、「非農業民を包摂した網野善彦さんの百姓論などは論外」(青木 2005)、「アミノさんはいらん」(森栗 2023、p.15-17)と、網野の「百姓論」は論外で「いらん」と位置づけられた。

戦後歴史学とは、第二次世界大戦後、民主化を標榜し、皇国史観を徹底的に批判し、マルクス主義の生産様式の発展段階で歴史を位置づける研究学派である。マルクス主義歴史学ともよばれる。古代はアジア的奴隸制、中世は家父長的家内奴隸制、封建的土地所有による幕藩体制、近代という発展段階による社会構成論(永原 2002)の立場による研究学派である(泉 2010、p.373-376)。1946 年に設立された民主主義科学者協会を前身とした左派歴史学者団体である歴史科学協議会は、歴史科学叢書を刊行し、雑誌『歴史評論』を発刊し、戦後歴史学に大きな役割を果たしてきた<sup>5)</sup>。中世と近世とを厳密に区別し、近世の小農の自立・展開・分解の態様を第一次資料の精密な分析から解明し、幕藩体制の構造的特質を明らかにすべきと規定した(安良城 1953)のは、戦後歴史学の大きな到達点であった。

マルクス主義歴史学の発展段階に関しては、二宮宏之「戦後歴史学と社会史」(1999)による

批判が正鵠を射ている。二宮によれば、1980年頃、高度経済成長・安定成長が終焉をむかえようとしていた時期、社会史が登場し、国民国家における発展段階社会構成論の戦後歴史学に対して変革を求めた。社会史は近代に対する懐疑、批判に起点を置いている。国民国家の普遍性から地域性へ、マルクス主義の発展段階という抽象的概念（社会構成主義）から日常生活世界の長期波動へ、物質から心性へと社会史は新しい関心を提示した。社会史は「先のみえない相対主義」（泉 2010、p.217）との批判をうけつつ、マルクス主義歴史学の教条化固定化したヨーロッパ近代発展モデルからの相対化を示唆している（泉 2010、p.7、371）。

田中圭一『百姓の江戸時代』（2000）は、近代・近世を区別し、近世を封建社会と規定するマルクス主義歴史学を批判している。田中は、北前船が往来した近世先進地である佐渡の実証的調査から、江戸時代を封建社会ではなく、工業化以前の近代社会と規定している。近代と近世を発展段階で区別することなど、佐渡や日本海沿海のダイミズムに目をこらした歴史研究では不可能なのである。

マルクス主義歴史学の評価は簡単ではないが、マルクス主義歴史学の研究室で学び、後に網野とともに奥能登古文書調査を行った泉が、自らのアンビバレントな実体験を吐露しつつ解説しており（泉 2010、p.4-6、375）、中立的な評価として注目される。本論は泉に導かれて、網野の海民論を検証している。

本論は、戦後歴史学の一部からは「論外」「いらん」とされてきた網野の提案した多様性複合性ある海民<sup>6)</sup>の生活世界に関して、熊野の水軍と鯨方、および能登の塩業を中心とした経済活動から検証することを目的とする<sup>7)</sup>。

## 2 日本史学で論じられなかった網野の海民論

網野善彦の提案した多様性複合性ある海民、百姓論などの議論は、現在の日本史学ではどのように位置づけられているのだろうか。本章では、日本史学の研究教育のひとつの到達点である、岩城卓二他編『論点・日本史学』（2022年）（以下『論点』と表記する）によって、日本史学における網野の都市論・アジール論、および海民論の位置づけを推察する<sup>8)</sup>。

日本史学は帝国大学国史学科に始まる。帝国大学は、レオポルド・ランケによる近代国民国家へと至る各国の実証主義史学、史料批判による科学的な歴史学を受け入れた。「国史学」は近世の国学・漢学の成果をとりいれつつ、国民国家体制の成立を歴史のゴールと考えて研究してきた（上島亨「はじめに」『論点』p.iii）。今、近代国民国家を終え、グローバルな消費大衆社会と情報化した日本において、日本史学<sup>9)</sup>は我々にどのような知見を提供してくれるのであろうか。日本史学はいったい何をめざしているのであろうか。

『日本の社会史』には、単一国家、単一民族、単一文化観への批判の上に立って、地域史を重視し（略）周辺世界との関連においてとらえることが主張され、従来軽視されてきた非農民や女性・老人・身体障害者・病人等に注目すべきとしている（朝尾・網野他編 1987、p.v-vi）（上島亨「日本中世史の論点 総論」『論点』p.83）。先に紹介した二宮宏之「戦後歴史学と社会史」（1999）田中圭一『百姓の江戸時代』（2000）はこの立場と通じるものであり、『日本の社会史』の知見は、現代日本にとって実践知の高い重要な歴史学と思われる。

『論点』でも、日本の国民国家とはどこをさすのか、重要な論点を提示している。北海道の領有（1869年）と琉球処分（1879年）、台湾、南樺太、朝鮮の植民地・併合地の歴史は、日本史

学の対象になりうるのか。民族・国民をめぐる課題が残る。こうしたなか、日本史学における台湾史の忘却に関して、1990 年代以降、台湾島史観（北村嘉恵「植民地台湾」『論点』 p.260-261）が紹介されている。日本国民国家史ではなく、また中国史でもなく、台湾に暮らす人々の歴史をめざす姿勢は、我々にとって重要な知見であるのみならず、地方（田中の場合は佐渡）に暮らす人々にとっても地方史の意味を示唆し、ひとつの方向性を示している。

『論点』はこれまでの実証史学についても厳しく自己批判しており、「政治権力側に残る公文書にとりわけ高い価値をおきつつ「実証的」に研究・構築されてきた歴史像を信奉するあまり、様々な当事者による証言のリアリティを「偏ったもの」「中立でないもの」と軽視してきた（上野 1998、pp.157-158）」と上野千鶴子の歴史学批判<sup>10</sup>を紹介し、「実証的」「客観的」という言葉によりかかって自らの権力性に無自覚であったり、史料の豊富な主題や記録の残りやすい側の声をもとに考えようとしすぎたりする、日本歴史学の問題点を真摯に自己批判している（塩出浩之他「日本近現代史 総論」『論点』 p.229）。

『論点』には、戦後歴史学を主導してきたマルクス主義歴史学の、社会構成主義、農奴、封建的大土地所有の文字はない。家父長制は家族論に限定して説明され、封建的大土地所有についても「家父長的な経営」とのみ記されている。マルクス主義歴史学のもとで暗く否定されるべき江戸時代像や愚民論に対しても『論点』は批判的で、近代化論・ポストモダンによる豊かな江戸時代の再発見を評価している。一方で、識字による豊かな江戸時代像を、民衆の進歩・成長の面的かつ過大な再評価との反論も紹介している（工藤航平「知の形成」『論点』 p.206）。

網野善彦のアジール論については、寺院の空間がアジール（無縁）の地だといわれることもあるが、祈祷をはじめとする宗教活動は軍事行為のひとつであり、寺院も戦争に巻き込まれることは避けられなかったとして、網野のアジール論を否定している（トーマス・コンラン「中世の合戦」『論点』 p.141）。アジールの展開は、地域、寺社によって異なるものであり、『論点』の指摘は網野のアジール論に対する論拠ある否定にはなっていない。

また網野善彦によって提唱された、中世の市などの交易による「都市的な場」「町場」は、「一世を風靡した感がある」として、鎌倉・京・奈良・府中など政治都市のみが中世都市であるとする論とを両論併記している（高橋慎一郎「中世の都市」『論点』 p.130-131）。網野の「都市的な場」「町場」を否定はしないが、「一世を風靡した感」と軽視している。「都市的な場」「町場」論を流行と決めつけ軽視する姿勢は、実証的研究態度とはいえない。

このように、多様な執筆者による率直で、多様な批判を含んだ『論点』であるが、何のための日本史学、誰のための歴史教育なのかがわからない。

同書は、歴史像を組み立てる醍醐味（『論点』帯）、歴史学の魅力を伝え（略）プロの研究者の興奮を伝え（略）学んで欲しい（上島亨「はじめに」『論点』 p.i）という。皮肉を込めていえば、権力性あるプロの歴史学者の興奮、ときに古文書を持ち去って返さない（本論第 3 章）ような興奮への同調・醍醐味が、日本史学の研究・教育の目的なのであろうか。『論点』には、過去の日本史学への反省も含め多様な論点が配置されている。しかし近代国民国家を終え、少子高齢化、グローバルな大衆消費、情報化のなかでの消滅自治体を抱える地方の課題が山積する私たちにとって、『論点』に羅列された日本史学の研究総括、日本史学個別論は、いったい何を提供するのか。何をめざした日本史学なのであろうか。

『論点・日本史学』のなかでは、網野のアジール論・都市論は「一世を風靡した感」と軽視されているが、海民論に関しては記述さえされていない。海民論は論外として、無視されている。

本論は、論外と無視された海民論について、網野が論じた熊野・能登で検証する。

### 3 『古文書返却の旅』と海民仮説

戦後の海村に関する歴史史料発掘には、『若狭漁業史料』（小葉田 1956）とは別に、漁業制度内実を明確化するため、水産庁東海区水産研究所による文書調査解説（漁業制度資料調査保存事業）がなされた。この調査を示唆した渋沢敬三は、別に海村文書（祭魚洞文庫<sup>11)</sup>）を自ら設立した日本常民文化研究所で収集していた。

1949 年秋、東京大学大学院生であった網野善彦は、この水産庁の古文書借用、解説原稿化事業に関わってきた。しかし、予算打ち切りで事業破綻しつつあった 1955 年頃、網野は京都大学小葉田淳から、若狭田烏秦家文書に関する問い合わせを受けている。当時、事業打ち切りの混乱のなかで、借用文書は未整理、未発見で、網野は小葉田の問い合わせに答えられなかった。これをきっかけに、網野は若狭海民の研究に関わるようになった。本章では、網野の海民論のきっかけとなった水産庁東海区水産研究所月島分室による文書調査解説（漁業制度資料調査保存事業）の経緯について、その経緯を記述した『古文書返却の旅』（網野 1999）を整理し、海民研究の意味を論じる。

さて、小葉田の問いに網野が答えられなかった未発見文書は、後に「若狭」ではなく、「紀州」と書かれたリング箱<sup>12)</sup>から発見され、小浜市史編纂室『小浜市史 諸家文書編 3』（1981 年）、小葉田編『福井県史資料編 9』（1990 年 [網野が編集担当]）として刊行された。小葉田・網野関わった『小浜市史』『福井県史』の編纂が、網野の海民研究につながっている。

水産庁史料には、他にも未返却の借用文書があり、網野は 1980 年に神奈川大学に転勤し、神奈川大学が受け入れた日本常民文化研究所で借用文書の返却を続けてきた。『古文書返却の旅』（網野 1999）は、その長い活動の記録、かつ史料の歴史学的意味の再発見、総括であり、かつ海民研究・調査の概要でもある。

この海村に関する水産庁史料返却のプロセスで、網野は多様性複合性ある海民論という大きな仮説を明確にした。表 1 は『古文書返却の旅』に示された、古文書借用と返却の経緯、および海民の記述をまとめたものである。

この記述から、以下のような海民研究の特色を書き出すことができる。

- ① 漁業制度史調査は、水産庁の政策課題であるとともに、渋沢敬三が提示した日本経済史研究における重要な課題である。
- ② 漁業制度史の調査は対馬、瀬戸内海、若狭、霞ヶ浦、九州松浦、佐渡とともに熊野、能登が重要な研究対象であった。この膨大な史料の返却のなかで、海民論は構想された。
- ③ 漁業制度史のために、網野は一生をささげ、神奈川大学に転勤している。漁業制度をもとにした海民研究こそ、網野史学の本丸である。網野の都市研究は能登などの漁業制度研究が基礎となっている。
- ④ 海民の北海道から中国にひろがる都市的経済活動を示す文書があり、対馬・佐渡の寄合、酒迎など、海の武士団の遺習を思わせる民俗が訪問時に残っていたことがわかる。

『古文書返却の旅』に示された漁業制度史研究の膨大な史料が、網野の海民論の基礎となって

表 1-1 網野善彦『古文書返却の旅』の概要 (1)

頁	キーワード	内容
p.4-9	水産庁月島分室 若狭 未返却	1949 年秋 水産庁東海区水産研究所月島分室 漁業制度内実を明らかにするため(宇野脩平が主幹)。網野@東大院生アルバイト 他に宮本常一、阿部善雄@東大借用(佐渡、若狭、紀伊、常陸、下総) 1954 年 委託予算打ち切り⇒破綻が見える⇒1955 年水産庁資料館(戸越保管庫)に[月島史料、祭魚洞文庫(渋沢所有)、筆写本(原稿用紙 30 万枚)]が眠る 網野が 1950 年 水産庁として借用した若狭田島・秦家文書も保管庫へ 1953 年 京都大学小葉田淳 若狭田島・秦家文書 不明の問い合わせ⇒未発見
p.11-12	真鍋島 返却もれ	1969 年 宇野死去⇒真鍋島真鍋家文書 引取 茨城県関係⇒県史編纂室引取。 宮本常一保管(武蔵野美術大学)+その他借りっぱなし文書⇒日本常民文化研究所 1975 年 紀州日前国 懸神社、紀氏所蔵中世文書 返却 なお残る⇒和歌山県史編纂室から罵倒され、他にも問い合わせ多数
p.14		1980 年 網野が名古屋大学より神奈川大学に転勤 1982 年 勅日本常民文化研究所が神奈川大学付置研究所とし文書移管
p.20-21	対馬 寄合	1950 年貸出宗家文書(1688-1854 年)「海魚記録」「御浦方記録」「御手鯨組記録」
p.37-39	霞ヶ浦・北浦・海部	入会の浦 毎年 10 月 20 日の寄合、網の時期、濫獲防止、漁具・漁法制限⇒法度確認 霞ヶ浦四十八津、北浦四十四ヶ津=海部注文(香取大瀬宜文書・応永[1373])
p.53	二神島・由利島、中国通貨	宮本常一の借用(『私の日本地図』4 で紹介される)。網野の返却の旅⇒文書を新たに預かり+宋銭、明銭、元銭、寛永通宝、清銭秘蔵を告知される
p.76	能登 九学会調査	1952 年 渋沢敬三主導 九学会連合総合調査*能登に文書がないのは「上杉謙信と日本常民文化研究所が持って行ったからだ(宮本常一借用)」といわれた
p.90-94	水呑	配流 辺境 中世領主(上時国家)・農奴のイメージは思い込み。領主は大船所有、松前で昆布仕入れ、京、大津、大坂で販売。損失担保として子を下人差出、船頭は独断商売。領主は鉛山、鮭漁(町野川)、金融も経営。輪島は頭振 438 軒/総 621 軒。頭振(水呑)とは土地を持つ必要のない廻船人・商人百姓(諸職)⇒都市空間としての能登。上時国家の交易は北蝦夷地(サハリン)に及ぶ
p.106-109	紀州	1950 年 紀州文書調査 30 軒借用/週 小山家南朝の新宮上綱(水軍)文書 『紀伊統風土記』に南朝文書所蔵 ⇒『紀伊国統風土記』にかかれた文書 を再度預かり、撮影し返却 ⇒芦屋・小山家が 1995 年 阪神大震災で被災被害、文書不明。
p.111-113	阪神大震災	
p.134	文書持ち帰り 熱海 松浦	東大史料編纂室目録索引部部長月島分室外部調査員 阿部善雄 文書持ち帰る⇒研究所として阿部名義で借りた平戸・松浦文書、返却・寄託・寄贈手続
p.152	佐渡 坂迎 寄合	1950 年佐渡 姫津浦 石見から移住 佐渡漁業自由特権の鑑札 帖箱 年寄衆全員の立会がないと開けられない 戸地 年寄衆 羽織袴袴 坂迎 「東京から水産庁 いかがしたものか」衆議一決
p.156	若狭 刀禰 巾着網 九学会調査 京大小葉田淳	田島巾着網 多島浦:八人衆 汲部つるべ浦:十四人衆 長百姓が漁業権を輪番交替で使用。中世の刀禰 秦家 北条氏三つ鱗の紋 関渡津泊通行自由の旗章 1956 年 網野に、若狭秦氏から文書返還を求めるはがき(網野名で借用) 1953-55 年 京大小葉田淳 地歴共同調査『若狭漁村史料』⇒未発見 1967 年 水産庁 返却予算化⇒小浜市史編纂室に貸出『小浜市史 諸家文書編 3』 1981 年、小葉田編『福井県史資料編 9』1990 年
p.170-172	真鍋島 借用未刊 史料補修	1950 年借用 『備中真鍋島史料』1・2・8 巻のみ刊行(1955 年) 一部返却 宇野が一部自宅に持ち帰っていた史料が、虫食いで発見される。 全国真鍋会から問い合わせ⇒1982 年 岡山県史編纂室と連携し補修
p.186-189	文書移管 月島分室⇒ 水産庁資料館 常民文化研究 所	月島分室への寄贈文書・祭魚洞文庫(渋沢敬三)⇒1956 年戸越水産庁資料館で死蔵⇒1974-1978 年 日本常民研究所と水産庁史料に対する水産庁整理委託費計上。しかし、寄贈文献に借用文献が混じり、混乱あり 1989 年 中央水産研究所分室に集め⇒1992 年 神奈川大学常民文化研究所に委託管理

\*九学会は、日本言語学会、日本考古学会、日本社会学会、日本宗教学会、日本心理学会、日本人類学会、日本地理学会、日本民俗学会、日本民族学協会よりなる。

いる。マルクス主義歴史学を中核とする日本史学本流としては第2章で示したように、これまでの発展段階説の枠組みを変えてしまう可能性がある海民論は、都市論のような軽視ではなく、「論外」と無視したい仮説であった。『古文書返却の旅』は、日本史学本流の海民論無視に対する論拠あるアンチテーゼの意味がある。

本論では、網野の海民論のうち、熊野・能登の複合的経済活動について、次章以下で検証する。

## 4 熊野鯨方と生活世界

### 4-1 『小山家文書の総合的研究』

『古文書返却の旅』で網野は、熊野鯨方について以下のように示唆している。

熊野山新宮<sup>じょうこう</sup>として、小山氏が南北朝の動乱の中で、「海賊」=水軍として活発に活動し、西向に「城山<sup>じょうやま</sup>」という本拠を持つ「海の領主」であった。(略)小山氏の本拠西向浦が古座浦と深い関りを持ち、小山氏は「海の領主」、水軍の戦闘方法を継承しつつ、古座の鯨方と結びついて捕鯨に従事した(網野 1999、p.114)。近世に入り小山氏は海賊を引退したようだ。1588年、秀吉が海賊停止令を出したことで、海の領主の新たな職探しが始まり、小山氏は捕鯨に目を付けたのだろう。各地の海の領主にも同様のことがあったと推測でき、興味深い。また、海賊の生業の1つである海上警護が、江戸期に異国船警備や遠見番所に受け継がれているという(網野 1999、p.144)。

この網野の示唆を受けて、国際常民文化研究機構／プロジェクト型共同研究(坂本亮太代表)が実施され、「熊野水軍小山家文書の総合的研究」(神奈川大学国際常民文化機構 2021)が報告された。共同研究報告では、

- 1 総論 熊野水軍小山家文書の総合的研究 熊野の海域史・序論
- 2 熊野水軍が築いた城館 史跡安宅氏城館跡を中心に
- 3 熊野地域の港津と城館
- 4 紀伊半島における中世の備前焼流通
- 5 紀伊守護と紀南の水軍領主
- 6 「色川文書」所収の忠義王文書に関する一考察 受容過程を中心に
- 7 浦方以前 紀州海辺部の中世的様相
- 8 土佐国大忍庄「安芸文書」の成立過程
- 9 解題 紀州小山家文書 久木小山家文書を中心に

など、多くの成果が示された。しかし、報告書を見る限り、網野が示唆した熊野海民の生活世界、たとえば、熊野古座浦鯨方と小山氏との関係・廻船と熊野水軍との関係などについては、十分な答えを用意できなかったのではないか。

本章では、熊野の海民と鯨方・廻船の関係について検証する。

## 4-2 古座の鯨方

紀州太地の鯨組に関しては、橋浦泰雄『熊野太地浦捕鯨史』（橋浦 1969）があり、熊野捕鯨全般については、田上繁「熊野灘の古式捕鯨組織」（田上 1992）が詳しい。また羽原又吉『日本漁業経済史』（1952-1955 年）にも、鯨方資料が掲載されている。網野が指摘した古座浦には『古座浦捕鯨史概略』（太地 2006）があり、古座を中心として熊野の捕鯨全般について、以下のよう

にまとめられている。

- 1596 年 三河から紀州熊野進出（西海睨記）
- 1606 年 太地浦に和田忠兵衛（鎌倉落ち武者）、伊右衛門（堺）、伝二（知多半島師崎）が到り捕鯨を始める（太地家文書）
- 1618 年 太地浦 和田金右衛門が尾州小野浦の羽差与宗次を雇う（太地家文書）  
その後、権十郎、惣十郎（勝浦）、彦兵衛（三輪崎）、六兵衛（太地浦）が羽差として活躍（和歌山県牟婁郡捕鯨沿革）
- 1626 年 三郎太郎（古座浦） 後藤有川海口浦で鯨突（日本捕鯨彙考、江口家文書）
- 1624-1643 年（寛永年間） 六右衛門（古座浦）五島浦桑郷魚目で鯨突組を組織する。  
この頃 古座清兵衛組が鯨組として五島列島平島に進出（宇久井村文書）
- 1659 年 藩営古座鯨方（古座組）開設（太地家文書）
- 1677 年 和田角右衛門（太地浦）が網掛け突き取り捕鯨法をはじめ、同年古座でも導入（太地家文書、古座史談）
- 1690 年 紀州御手組として古座組鯨船 20 艘（古座浦）、角右衛門組（太地浦）、新宮御組（三輪崎組）
- 1866 年 第二次長州征伐に、古座鯨方 5 艘、太地鯨方 3 艘、三輪崎鯨方 2 艘が、芸州へ向かう

海賊禁止以後、熊野は北条得宗家による支配となっており（日置町 1956、p32-33）、海上集団戦法を知っている和田氏を称する鎌倉落ち武者が捕鯨に関わっているという伝承は、真偽は別として、一定の意味があるものと思われる。しかしながら、実際は尾州・三河からの技術伝承であり、鎌倉落ち武者伝承との齟齬はどのような歴史を暗示しているのか興味深い。古座の鯨方は、地元での展開よりも五島列島での展開が多く記されている。幕末では、鯨組は紀州藩の長州征伐に、紀州藩公事として派遣されていた。鯨組は近世、紀州藩の関与により五島出稼ぎも含め鯨取りを保障されていた。

『古座浦捕鯨史概略』には、古座組の由来は記述なく、太地浦と三河、知多、鎌倉武士和田氏の記述がある。また、『古座町史料 捕鯨編』／（串本町史編さん委員会編、2008 年）をみても、網野が示唆した南朝の新宮上綱（小山氏）と古座浦鯨方とを直接結びつける資料を確認することはできない。

## 4-3 熊野の廻船

近世の紀州廻船とは、大型帆船によって実施された日高（菌浦ともいう、御坊市）、比井（日高町）、富田（白浜町）の紀州 3ヶ浦の廻船をいう（松本 1982）。日高地方の比井廻船については、坂本亮太「『古今年代記』を読む（2）－比井廻船のはじまり－」が興味深い（2019 坂本）。



以下、紀州廻船の概要を紹介する。

1619年（元和5）、紀州牟婁郡富田浦の250石船が堺の商人に雇われて、大坂から酒、油、醤油、酢、木綿、などの日用品を積んで江戸に運んだが、これが上方・江戸間の一般貨物回漕の始まりであり、菱垣廻船の濫觴とされている。1619年は家康の十男、徳川頼宣が紀州藩主として入国した年である。1659年（元禄7）江戸で下り品問屋の連合体である十組問屋が結成され、大坂でもこれに呼応して十組問屋（後の二十四組問屋）が成立したが、紀州廻船はその専属として菱垣廻船に加入し、次第にその中核は日高地方になっていった。なかでも比井廻船は1719年（宝永6）頃に、摂津西宮酒積組合（兵庫県）と関わるようになり、日高組から離れ廻船を増やしていった。

1730年（享保15）には、積荷仕立や共同海損などの事情で、酒組合が十組仲間から分離し、独自で樽廻船を持つようになると、紀州廻船はこれに参加した。しかし、後年には伝法廻船（大阪市）、御影廻船（神戸市）の進出で、次第にその勢力が衰えていった。1833年（天保4）樽廻船内の事情変化のため、紀州藩は紀州廻船を菱垣廻船に復帰、合体させ、再興をはかった。

一方、熊野地方では、『新宮市史』（新宮市史編さん委員会1972、p.249）には、1641年に江戸送りのため53艘の炭御船、木炭の増産が記され、17世紀中頃より熊野川河口に新宮廻船と鵜殿廻船が発展したことがわかる。熊野には菱垣廻船・樽廻船とは異なる廻船があった。『那智勝浦町史 上巻』（那智勝浦町史編さん委員会1980、p.364）には、1628年（寛永5）に、いさば3艘、商船3枚帆が記されている。1657年（明暦3）に3艘（御浦改書上ヶ帳〔宇久井文書〕）、1709年「古座有田組十三浦動員表」に古座83艘が記されている（那智勝浦町史編さん委員会1980、p.330）。また、海難救助と濡荷処分の権利、濡荷競売などが記されている（那智勝浦町史編さん委員会1980、p.319）。

小山家文書の小山家の本拠であった熊野水軍の安宅について『日置町誌』（安宅1956、pp32-33）には、北条得宗家による海賊禁止令以後、地域は北条氏支配となり、口熊野加子役（慶長16年加子米究帳）に、古座浦90人（安宅1956、p.105）とある。熊野水軍は加子役として藩の軍事的必要に組み入れられたものと思われるが、小山氏が移った城山の熊野水軍と廻船を直接結びつける資料は確認できなかったし、菱垣廻船・樽廻船は古座地方城山の小山氏とはまったく異なる日高・比井・富田地方での展開であった。近世の廻船をめぐるのは、かつての熊野水軍ではなく、紀州藩の政策が大きな意味をもっており、水軍の関与を示す資料を確認することはできなかった。

#### 4-4 熊野の鯨方と廻船に関する仮説

同じ紀伊半島でも「階層構成から見た漁村の変容（上）：伊勢度会郡田曾浦の中世から近世の変化」（坂井1988）は、中世末から近世の変化を文禄検地で検討した結果、漁村のなかに密に残る鉄砲衆であった地侍層をあぶりだしている。

これに対して、紀州熊野の鯨方は、中世の外部武士の流入を受け止め、それを紀州藩が認知し、表立って海上警護や水難救助など公事にかかわった。

一方、近世紀州廻船は、日高であれ、熊野（鵜殿廻船、新宮廻船、御炭船）であれ、当初は江戸建設のため、次第に十組問屋とむすびつき江戸・大坂間の回漕を担う廻船となり、紀州藩の公的な認知、意向にそったものであった。

網野の指摘する

(小山氏は)南北朝期、熊野山新宮上綱を称し海賊(水軍)として活躍し、西向浦に城山を置く海の領主である。西向浦と関係の深い古座村鯨方と結びつき、海賊としての技術を駆使しながら捕鯨に従事した。古座川添いの村は、大規模な廻船業に従事した(網野 1999、p.114)

という海民活動に関する仮説は、近世では鯨方といい廻船といい、紀州藩の公的な面にのみ示されており、しかも廻船は熊野と遠く離れた日高地方中心であり、古座廻船と水軍を直接結びつける資料は今のところみつけれなかった。

坂本亮太「資料編 I. 文書史料 解題 紀州小山家文書」(坂本 2021、p.184)も、「熊野灘の古式捕鯨ー太地・古座浦を中心としてー」(田上 1992)、「近世文書と近世の小山家」(田上 1990)を引用し、江戸時代に西向小山氏が遠見番役を務め、捕鯨に直接関わっていたかどうかは再検討が必要であると指摘している。

むしろ、ペリー来航の 62 年前、1791 年(寛政 3)米国船・レディ・ワシントン号、グレース号漂着の経緯を、『紀州小山家文書』の「101 四月十六日 樫野崎沖にて唐船体の船二艘発見につき注進」(日本常民文化研究所 pp.203-204)からみると、古座組大庄屋である中西理左衛門が紀州藩主に異国船二隻の漂着をただちに知らせたのに対して、地侍で西向浦の庄屋で樫野崎遠見番役であった小山段右衛門は、詳細な異国船絵図を注進している。その絵図には「印は赤白絹のそめわけ□舳のもの有之」と記され、日本で初めての星条旗が描かれ、船のみよしの下には白衣の女性人形があり、「くろんぼ 一艘に二、三人も有り」と克明に記している。この異国船発見と、克明な記録こそ、熊野水軍の証左、血脈を想像させるものである。小山家には、鯨方や廻船の足跡はみえないが、日本初の米国船・星条旗記録絵図から、中世の水軍の命脈が近世まで保たれてきたことを知るのである。

## 5 能登の塩業・廻船・鋳物師と生活世界

### 5-1 襖下張り文書と塩手米

能登の上時国家の廻船交易に関しては、泉雅博「能登北前船交易ー下張り文書の整理作業のなかから」(泉 1994)がある。上時国家の塩生産に関しては、白水智「能登土方領下の塩制について」(白水 1994)がある。

泉は上時国家の通常伝来文書には、大福帳、械役、船役など公的なもの、表面的なものが大量にあるが、襖の下張り文書には、廻船交易文書が多く、大国丸、安清丸、永豊丸、時国丸、などの船名が見え、江差から笹目(鯨の白子、数の子を除いた内臓)を取り寄せたことが記されているという(泉 1994、pp.288-297)。裏の蔵にあった「古シ蔵文書」にも、廃棄予定であった廻船交易文書があった。泉は、廻船交易など私的な経済活動は、下張り文書、古シ蔵文書など廃棄文書に残り、大福帳や税役の文書などが伝来文書となったと結論づけている。

白水は、1596-1615 年(慶長年間)、上時国家が、近隣村(曾々木村)に塩手米を貸していた(白水 1994、p.194)ことをつきとめ、前田藩の塩釜銭以前に、在地領主による塩手米慣行があったことに注目している。前田藩に編入される前の土方領でも、1606 年(慶長 11)に塩釜銭、塩手米代塩、御買塩(白水 1994、p.196)がかけられ、土方領の黒島に廻送し、廻船交易されたことが指摘されている(白水 1994、p.200)。さらに 1658-1661 年(万治年間)、曾々木村の徳兵

衛が塩手に御払米で製塩させ、製塩後に納められた塩を集めて船で売りさばいていたことを紹介している（白水 1994、p.202）。

白水は「(加賀藩の)専売制に専ら目を奪われ、制度自体の存在を前提として塩生産のあり方や支配の形態を分析していく傾向」を批判し、制度という衣を一枚めくれば見えてくる中世以来の自立的な製塩村のあり方、近隣諸村との有機的なつながりといったものを主軸にすえて（白水 1994、p.231-232）地域の歴史を見ていく必要があることを指摘している。

## 5-2 『能登穴水・中居鋳物師・塩文書』が示す生活世界

能登は鋳物生産で有名であり、江戸・上方の風呂屋は能登出身者が多い（吉田 2021）（高津 1963）。釜をかついで能登から来たと伝承されているが、実際は能登同郷出身者が同郷同業組合を頼ってまずは豆腐屋に入り、修行をつんで資金を積み立て、同業者株を買って風呂屋の組合に入ったものと思われる。

能登の穴水は鋳物生産地として有名だが、小林太二家文書を整理した目録『能登穴水・中居鋳物師・塩文書』（小林 1990）（以下、『中居鋳物師・塩文書』と称す）がある。目録のなかで、鋳物師など生業に関わる 10 分類を紹介し、鋳物のみに限らない多様な生業をみたい。分類は同書の分類項目に従う。なかには、いわゆる偽文書とされる「鋳物師職由来」などを含むが、興味深い生活世界を類推することができる。

表 2 『能登穴水・中居鋳物師・塩文書』のおもな文書分類

分類	内容
鋳物師職	鋳物師職由来（1624 年 [寛永元]）など 11 点
幟旗、鑑札	幟旗（勅許左方総官）「禁裏諸司真継能登守支配 御鋳物師中井小林猪兵衛尉藤原家吉」など 11 点
蔵人所牒	蔵人所牒（1167 年 [仁安 2]）など 9 点
釣鐘と半鐘	小津正永寺釣鐘（1791 年 [寛政 3]）など 13 点
絵図	鯛釜絵図（1475 年 [文正 10]）、塩釜絵図（1636 年 [寛永 13]）、松前絵図（1800 年 [享和 2]）など 11 点
鋳物	頼朝卿より鋳物許可（写し）（1186 年 [文治 5]）、貸釜帳（1697 年 [元禄 7]）など多数
塩関係	御借塩釜賃銀之事（1614 年 [寛永 18]）、覚／塩積船書式（1870 年 [明治 3]）、覚／灰積廻願書（1870 年 [明治 3]）など 121 点
海運	宿船出船之覚（1664 年 [寛文 4]）、仙台より来る唐船の事（1739 年 [元文 4]）、金比良丸仕法定書之事／小林猪兵衛（1799 年 [寛政 11]）、金比羅丸松前宮之浦破船／小林嘉左衛門（1800 年 [寛政 12 年]）など 42 点
薬	小林伊兵衛（1847 年 [弘化 4]）など 22 点
漁業	覚（ <sup>いるか</sup> 鮪 網）／中井南村鮪とりら 13 人／買主 中居南村伊兵衛殿（1681 年 [延宝 9]）、前海 <sup>なまこ</sup> 単仕入借用証文／中居南村肝入伊兵衛他 8 人 取口塩屋清五郎殿（1794 年 [寛政 6]）、鰯網大漁帳 小林伊平（1887 年 [明治 20]）、覚／このわた江戸表へ指出し／中居南村肝入伊兵衛他 2 人（1887 年 [明治 20]）など 16 点

（小林太二『能登穴水・中居鋳物師・塩文書』1990 年より、筆者作成）

興味深いことは、地域の代表的な鋳物師が、いわゆる偽文書とされる鋳物師職由来（1624 年

[寛永 18]、頼朝卿より鋳物許可（写し：1186 年 [文治 5]）を所有していることだけではなく、

- ・ 塩釜、鯛釜を作り、釜を貸して、塩など製品のみならず灰を入手していたこと
- ・ 松前方面に廻船交易をしていたこと
- ・ 富山湾での回遊魚等の漁獲を買い取り、ときに前海峯漁のための借金をし、ときに漁獲製品を売りさばっていた

ことである。

### 5-3 能登の生活世界

『中居鋳物師・塩文書』からわかったことをもとに、そこから能登の生活世界に関して 5 点を類推したい。

#### 5-3-1 塩釜

『中居鋳物師・塩文書』には塩釜絵図（1636 年 [寛永 13]）、貸釜帳（1697 年 [元禄 7]）、御借塩釜賃銀之事（1614 年 [寛永 18]）とあり、鉄製塩釜を塩手師に貸し、製塩がなったあと、塩で支払ったものと思われる。「釜根帳」という表記もある（穴水町社会科研究部 1963 年）。塩釜の貸借は珠洲など塩田側でも確認されている（珠洲市史編纂専門委員会 1980、p.213）。こうした地域での自律的な塩業をめぐる貸借は、ひとり上時国家のいみならず、塩釜を作る鋳物師も行っていたことは興味深い。1630 年（寛永 7）、加賀藩が所有の鉄製塩釜を、鳳至郡中居村の鋳物師に作らせ、6 年間の借賃を藩に上納させ、後に釜を払い下げる「貸釜制度」に整備したのは、先行していた在地の自律的な塩業をめぐる貸借生活を、藩の制度に落とし込んだにすぎない。

こうした塩釜は、厚さ 1-1.5cm、直径 2m、深さ 30cm 平底の鋳物であり、江戸中期までは能登穴水町中居の鋳物師が作成し、その後、富山県高岡で大量生産されたものを使うようになった。

中居鋳物師の原料銑鉄は、出雲（満右衛門船）・石見（多七丸、大国丸）から移入され、穴水には、原料銑鉄移入に関わったといわれる造船・廻船問屋の田尻源内を唄った「出雲節（源内節）」が伝えられている（穴水町社会科研究部 1963）。

室町時代には、能州輪島から船で津軽に向かい、現地で塩釜を作って盛んに製塩した者がいたという伝承もある<sup>13)</sup>が、確認できていない。

#### 5-3-2 塩と肥料の交易

『中居鋳物師・塩文書』には「塩積船書式（1870 年 [明治 3]）、覚」「灰積廻願書（1870 年 [明治 3]）」などがあり、塩のみならず焼灰も廻船販売していたことがわかる。泉も能登の珠洲郡馬繰浦が、単なる風待ち港ではなく、塩積みだしや釜屋灰の交易で栄えたことを指摘している（泉 2010、pp.199-228）。泉は上時国家が、江差から笹目（鰯の白子、数の子を除いた内臓）を取り寄せたことを報告している（泉 2010、p.294）。1745 年（延享 2）、塩士中・百姓中が「こやし魚」の漁を認めて欲しいといっている（珠洲市史編纂委員会 1980、p.230）。

激しい労働を要求される塩士には、労働食糧確保のために収量豊かな田が求められる。能登の千枚田とは、家父長的領主によって収奪された農奴が、絶壁の山頂まで耕して生き延びる貧しい姿ではない。塩業労働者のための食糧確保を考えると、各地の塩釜から移入された釜屋灰、北海道から移入された鰯の笹目、塩士中・百姓中が近海で漁獲するこやし魚などの肥料を投入した高

収穫の田であった。

### 5-3-3 廻船

上時国家文書からは、幕末の記録であるが、大国丸（1847年〔弘化4〕～、羽州能代・松前・庄内・江差・新潟・笠岡などと交易）、安清丸（1863年〔文久元〕～、大坂・豊前・下ノ関・能登輪島・能登黒嶋・佐渡小木・津軽深浦・松前・越前新保・兵庫・阿波撫養・津軽鰺ヶ沢・蝦夷岩内・讃州多度津などと交易）などの廻船を所有し、海産物のみならず塩・砂糖・茶・綿・折草などを運んでいた。北蝦夷地まで交易を広げていたことを、泉・網野は指摘している（泉1994、pp.297-313）（網野1999、pp.98-99）。

『中居鋳物師・塩文書』の海運史料からも、鋳物師が廻船を所有し、船宿も営んでいたことがわかる。松前絵図（1800年〔享和2〕）から、鋳物師の交易も松前に及んでいることがわかる。

1849年（嘉永5）2月「当座出入帳（国田文書）」によれば、長保丸（久兵衛所有）は、行きは能登釜、亥子縄、味噌、米、酢、帰りは鯨等海産物を運んでいた（穴水町社会科学研究部1963）。

また『中居鋳物師・塩文書』のなかに、薬種があり、鋳物師家が、廻船に薬種商を乗せていたことも興味深い。

北前船の交易は、ひとり大坂商人だけではなく、能登半島各地の地方領主、大規模鋳物師などを中心に、多様に展開していたことは注目すべきことである。

### 5-3-4 漁業

鋳物師家が、直接、漁業に関わっていたわけではないが、富山湾に回遊する漁獲が大量にあった場合、鰯、前海単、鰯を買い取り、このわたなどの漁業製品を江戸で売りさばっていたことがわかる。鰯釜絵図（1475年〔文正10〕）から考えると、大漁にとれた鰯も釜で加工して、魚油は菜種油の代用として行燈用にし、鰯メ粕は肥料として販売していたことが予想される。

珠洲では寄せ鯨が記録され（珠洲市史編纂委員会1980、p.232）、これも販売ルートに乗せたものと思われる。海産物のなかには、塩、乾燥を少なくした半生魚（四十物）<sup>あいもの</sup>に加工したものもあった（珠洲市史編纂委員会1980、p.233）。

## 5-5 能登海民の生活世界

能登に関して『古文書返却の旅』は、「能登の配流・辺境（中世領主と農奴の関係）は思い込みであり、上時国家は大船を所有し、松前で昆布を仕入れ、京・大津・大坂で販売していた。鉛山、鮭漁（町野川）記入も経営していた。上時国家の直接交易だけではなく、船頭独断商売も可能であった。損失担保として子を下人に差出し<sup>14)</sup>、これが成長して船頭になった。輪島は総621軒のうち、438軒が頭振（無高百姓）であった。土地を持たない廻船人、商人（海）は古文書では「百姓」と書かれるが、その実、能登は百姓（諸職）が居ついた都市空間であった」（網野1999、pp.90-94）と指摘され、上時国家の活動は北蝦夷地（サハリン）に及んでいた（網野1999、pp.98-99）という。

網野の多様性複合性ある海民活動の仮説とは、「加賀藩の貸釜制度の外側または制度以前に、中世以来の自律した交易・貸借の関係性・生活世界があり、それは下張り文書等、隠された文書、伝来文書外から民衆のダイナミックな経済生活が見える」との仮説である。

この海民の生活世界に関する仮説は、上時国家のみならず、穴水の鋳物師でも、また珠洲の塩業でも確認することができた。

## 6 おわりに

網野善彦は膨大な史料を駆使して、漁業・塩業・水運業・商業から掠奪までの未分離生業を担った海民を、広義の「百姓」と定義し、その多様性複合性ある生活世界を論じてきた。全国を這うようにして訪問した古文書返却と文書所有者との歴史学的対話は、『古文書返却の旅』に記録され、「百姓」としての海民仮説として提示された。

仮説は、熊野では明証することが難しかった。しかし、能登では網野と神奈川大学常民文化研究所が調査研究した上時国家調査の成果と同様に、中居鋳物師や珠洲などで、海民の多様性複合性ある生活世界が確認できた。とくに、能登の海民とその広域複合経済に関して、中居鋳物師で確認できた意味は小さくない。

生活世界は、史料の有無、地域の特性のなかで、描きやすいこともあれば、難しいケースもある。ともあれ、そうした検証なしに、日本史学の主流といわれる戦後歴史学が、網野の百姓論・町場論を軽視し、海民論を論外とするのは、そろそろ考え直さねばならない。

熊野には熊野の、能登には能登の、佐渡には佐渡の、多様な生活世界がある。日本史学のめざすものは、権力性ある歴史専門家が示す近代国民国家の到達点である日本ではなく、個々の地方の歴史の深みから考える知見、地域づくりの未来に貢献することではないか。

マルクス主義歴史学がいう、一国発展段階説が破綻している<sup>15)</sup>のと同様に、網野が説く日本列島全体の百姓としての海民論も、一国海民百姓文化ではない。地域により、異なる生活世界がある。私たちは、いくつもの誇りある、特色ある地域の未来を考える生活実践の武器として、地方の歴史を研究し、物語ある地域づくりを模索する必要がある。

苛烈な戦争経験が残っていた昭和 20 年代には、マルクス主義歴史学が、権威ある歴史研究者の指導が、国家の未来を描いた（と思えた）のかもしれない。しかし、地方が疲弊し、災害が頻発しその復興が問われ、多様な地域価値が見直されている現代では、網野の海民論や都市的な場、アジール論といった生活世界論は、地域づくりにおいては、重要な示唆を読者に与えている。網野の仮説を「一世を風靡した感がある」などと軽視し、プロの歴史研究者の権力的指導、醍醐味にのみ期待する限り、日本史学の研究教育の未来はみえてこない。

本論執筆中、2024 年 1 月 1 日に能登半島大地震が発生した。

豊かな歴史基盤・文化を持つ能登が、過疎化になやみ、今また、大災害で苦しんでいる。本論で論じた地名が、被災高齢者が集まる孤立集落としてニュースでとりあげられ、愕然としている。復旧後の能登の過疎は、さらにすすむのであろうか。網野善彦が襖の下張り文書を調査した上時国家は、大屋根から倒壊している。多数の中学生や高齢者が二次避難所をめざし能登を離れている一方で、被災高齢者がインフラの途絶した吹雪の孤立集落を離れることができない。祈るような思いの毎日、「こんなときに」と、本論の投稿をためらっている。

私は能登柳田村で過疎地の子供たちに震災神戸に関する授業をしたことがあった。テレビのクルーを引き連れて、ナホトカ号重油流出事故に対処する海女のお母さんたちにインタビューしたこともあった（森栗 1997）。

日本海に突き出した能登半島の断層構造地形に住む人びとは、これまでも海を見つめた産業・文化と、厳しい災害、環境破壊、過疎のなかを生きぬいてきた。本論は、微力ではあるが、中長

期的には能登の未来を見据えることを目的に、誇りある能登の生活世界に対して、連帯をもって、こんなときだからこそ提示するものである。

2024 年 1 月 17 日 神戸学院大学にて

## 注

- 1) 京都大学文学部国史研究室、地理学研究室共同調査として、昭和 28-30 年実施され、丹生区有文書、秦家文書、大音家文書、阿部家文書等の中世文書を含む 701 点が収録されている。
- 2) 網野以前に漁村の多様な複合経営について論じたものに、羽原又吉『日本漁業経済史』（1952-1955 年）がある。『国史大辞典』第 3 巻（か）〔吉川弘文館、1983 年〕には、海民の項目はない。
- 3) 本論は、第 2 章、第 5 章で論じるように、揚浜式塩田を奴隷労働と単純に理解することには懐疑的である。
- 4) 生活世界とは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（フッサール 1995）で初めて提示された、後期フッサールの現象学の概念の一つである。生活世界とは、いっさいの学に先立って、すでにわれわれの直接の経験によって与えられている世界であり、したがって学そのものもこの生活世界から出発してはじめて、その真の意味を明らかにされるのである（フッサール 1995、p.546）という。自然主義的に考察されるこの世界はやはり世界そのものではない。むしろあらかじめ与えられているのは日常世界としての世界とされる（『現象学事典』1994、pp.259-263）。  
ヘーゲル『歴史哲学概論』やカー『歴史とは何か』など歴史哲学が、人類史をマクロに論じるのに対して、生活世界に関する史的研究は、日本海沿海、能登、熊野など地域を特定し、諸地域の日常世界の特性を論じる。歴史哲学が、論理実証主義史学とは異なる方法であると同様に、生活世界に関する史的研究も、また論理実証主義とは異なる史学方法である。論理実証主義は、19 世紀の科学主義のなかから生まれた、20 世紀歴史研究のひとつの方法であって、これのみが絶対的なものではない。
- 5) 発刊元である校倉書房は、2018 年廃業した。
- 6) 『国史大辞典』（吉川弘文館、1879 年）に、海民の項目記述はない。
- 7) 本論のようなメタヒストリーは、歴史家の上前をはねる「歴史の篡奪者」であるとの非難を被るかもしれないが（上野 1998、p.15）、歴史は歴史学者の権力的専横事項ではなく、私たち我が地域の側、生活者の側にもある。
- 8) 日本史専門家ではない著者には、日本史学全体における網野評価を位置づけることは難しい。ここでは『論点・日本史学』を使って、その位置を類推することにとどめる。
- 9) 「日本史学」は、一国民国家のための「国史学」の読み替えではない。
- 10) 上野は、従軍慰安婦問題に関する証言資料の扱いに関してのみ発言しており、歴史学一般の姿勢を批判したものではないが、上野論に着目した塩出浩之が、『論点』に誠実かつ自己批判的に記述したものとされる。
- 11) 豆州内浦文書を中心としたコレクション。祭魚洞とはカワウソのことで、その習性のように多々集めたという意味。
- 12) 主幹である宇野脩平は、水産庁研究所月島分室閉鎖後、東京女子大学に転勤しており、東京女子大学講堂の裏部屋に「若狭」「紀州」と書かれた古文書の入ったリング箱が集められていた。
- 13) 能登半島珠洲の塩協議会「珠洲の塩の歴史」<http://www.suzusalt.org/whats/history.html> に室町時代頃と記述されているが、【参考文献】を石川県立図書館で点検したが根拠を発見できなかった。珠洲市商工会議所にも問い合わせたが、能登地震の混乱で詳細が不明なままである。
- 14) 子どもを下人として差し出すことは、現代知識人からみれば奴隷労働かもしれないが、それは、一面的理解である。保険制度のない当時の日本海交易を考えれば、こうした労働をめぐる生活慣行があり、その貸し借りの労働経済のなかで地域の生活史があったことにも、我々は注目すべきである。
- 15) 『論点』で多様に議論しているが、「マルクス主義歴史学は、すべてが否定されたわけではない」と主張する歴史学者が同僚にいて驚いたことがあった。否定されたかどうかは『論点』にまかせるとして、マ

ルクス主義歴史学が、大衆消費社会、グローバルな情報社会、消滅自治体、格差社会を前にした私たちに、どのような知見を提示してくれるのか問いたい。

## 参考文献

- 青木美智夫「佐々木潤之助さんの日本近世史研究」『歴史学研究』798、2005 年  
 朝尾直弘・網野善彦他編「刊行にあたって」『日本の社会史』岩波書店、1987 年  
 穴水町社会科研究部編『穴水の歴史 第2集』穴水町社会科研究部、1963 年  
 阿部毅「中世塩業史に関する一考察－伊勢国度会郡大塩屋御菌－」『日本歴史』54、1952 年  
 網野善彦「中世における漁場の成立」『史学雑誌』72-2、1963 年  
 網野善彦「日本における海民の存在形態」『社会経済史学』36-5、1970 年  
 網野善彦「平安時代末期～鎌倉時代における塩の生産」『日本塩業大系 原始・古代・中世（稿）』日本専売公社、1980 年  
 網野善彦「講演 経済史再考－前近代社会を中心に－」『経済史研究』3、1999 年  
 網野善彦『古文書返却の旅』中央公論新社、1999 年  
 安良城盛昭「太閤検地の歴史的前提」『歴史学研究』163・164、1953 年  
 泉雅博「近世北陸における無高民の存在形態：一頭振について」『史学雑誌』101-1、1992 年  
 泉雅博「能登の北前船交易－下張り文書の整理作業のなかから－」『奥能登と時国家 研究編 1』平凡社、1994 年  
 泉雅博『海と山の近世史』吉川弘文館、2010 年  
 岩城卓二他編『論点・日本史学』ミネルバ書房、2022 年  
 上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998 年  
 安宅常介『日置町誌』1956 年  
 神奈川大学国際常民文化研究機構編『熊野水軍小山家文書の総合的研究』2021 年  
 串本町史編さん委員会編『古座町史料 捕鯨編』2008 年  
 小浜市史編纂室『諸家文書編 3』1981 年  
 高津等「大阪浴場組合の運営」『ソシオロジ』10-1、1963 年  
 小葉田淳編『福井県史資料編 9』1990 年  
 小葉田淳編『若狭漁業史料』福井県郷土史懇談会、1965 年  
 小林太二『能登穴水・中居鋳物師・塩文書』小林太二、1990 年  
 坂井達朗「階層構成から見た漁村の変容（上）：伊勢度会郡田曾浦の中世末から近世の変化」『史学』57-4、三田史学会、1988 年  
 坂本亮太「資料編 1. 文書史料 解題 紀州小山家文書」『神奈川大学日本常民文化研究所調査報告』29、pp.179-221、2021 年  
 坂本亮太「古今年代記」を読む（2）－比井廻船のはじまり－『博物館ニュース』和歌山県立博物館、2016 年  
 渋谷敬三「失敗史は書けぬものか」『渋谷敬三著作集 第3巻』、平凡社、1992 年  
 白水智「能登土方領下における塩制について」『奥能登と時国家 研究編 1』平凡社、1994 年  
 新宮市史編さん委員会『新宮市史』新宮市 1972 年  
 珠洲市史編さん専門委員会『珠洲市史 第6巻』珠洲市役所、1980 年  
 太地亮編 方森一夫監修『古座浦捕鯨史概略』私家版、2006 年  
 田上繁「近世文書と近世の小山家」『歴史と民俗』6、1990 年  
 田上繁「熊野灘の古式捕鯨－太地・古座浦を中心として－」（森浩一編『海と列島の文化』小学館、1992 年  
 田上繁「熊野灘の古式捕鯨組織」『海と列島文化 8 伊勢と熊野の海』小学館、1992 年  
 田中豊治「但馬漁業の展開とその流通構造」『経済地理学年報』18-2、1973 年  
 田中圭一『百姓の江戸時代』筑摩書房、2000 年  
 豊田武「中世京都に於ける塩・塩合物の配給」『社会経済史学』4-12、1934 年  
 永原慶二『20 世紀日本の歴史学』吉川弘文館、2002 年



- 那智勝浦町史編さん委員会『那智勝浦町史 上巻』那智勝浦、1980 年
- 錦昭江「中世・近世移行期における海辺村落の動向：狭諸浦の分析を中心として」『社会経済史学』60-2、1994 年
- 錦昭江『刀禰と中世村落』校倉書房、2002 年
- 二宮宏之「戦後歴史学と社会史」『歴史学研究』729、1999 年
- 日本常民文化研究所『紀州小山家文書』日本評論社、2005 年
- 橋浦泰雄『熊野太地浦捕鯨史』平凡社、1969 年
- 羽原又吉『日本漁業経済史』上巻、中巻 1、中巻 2、下巻、岩波書店、1952-1955 年
- 安宅常助『日置町志』日置町、1956 年
- 広山堯道『日本製塩技術史の研究』雄山閣、1983 年
- フッサール・エドムント『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1995 年（原書発行は 1936 年）
- 松本武一郎「酒を運んだ紀州廻船（1）～（3）」『日本醸造協会雑誌』77-5～7、1982 年
- 森栗茂一「重油流出事故に負けぬ海の文化」『朝日新聞』（夕刊）1997 年 3 月 7 日
- 森栗茂一『探究演習入門－読み・書き・対話・物語－』神戸学院大学出版会、2023 年
- 吉岡正松「能登塩田の歴史地理的考察」『自然と社会：北陸』9、石川地理学会、1952 年
- 吉田律人「横浜における北陸地方出身浴場業者の展開－昭和戦前期を中心」に『社会経済史学』87-2、2021 年
- 渡辺則文「中世塩業史の一考察」『広島大学文学部紀要』2、1952 年
- 渡辺則文『日本塩業史』三一書房、1971 年